

Title	歴史哲学の二つのアンソロジー
Sub Title	Two anthologies of the philosophy of history
Author	神山, 四郎(Koyama, Shiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.1 (1963. 8) ,p.104- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630800-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史哲学の二つのアンソロジー

神 山 四 郎

戦後、とりわけイギリスとアメリカから、歴史哲学関係の著作がたくさん出ているが、その中でも一九五九年に、期せずして、歴史哲学のアンソロジーが二つ出たことは注目に値する。

1. Gardiner, P. (ed.), *Theories of History*, The Free Press, Glencoe, Illinois, 1959.
2. Meyerhoff, H. (ed.), *The Philosophy of History in Our Time*, Doubleday Anchor Books, New York, 1959.
3. Rossmann, K. (hrsg.), *Deutsche Geschichtsphilosophie von Lessing bis Jaspers*, Sammlung Dieterich, Bd. 174, Bremen, 1959.

ロスマン編のものはドイツの歴史哲学に限られているので、今の学界の状況からすれば、いさゝか地方的という感じを免れない。つまり今ではもうそれだけ歴史哲学が一般化しているわけだ、歴史哲学をドイツ哲学の独占物と見る人はまずいない。だから今つくるアンソロジーなら少くとも英・米・独・ソ・仏

・西・伊にまたがってテキストが選ばれることが望ましい。だからここでは比較的その線に近いガーディナー編のものとマイヤーホフ編のものだけを比べてみよう。

ガーディナーのは五五〇頁にわたる大部のもので、歴史哲学の総覧的な編集としてはおそらく今までのうち最大のものである。はじめ *Philosophies of History* という書名で予告していたのを *Theories of History* と改めたのは、イギリスの学者が歴史哲学というコトバにまつわる観念論的な先入見を避けようとしてのことであろうが、今では「哲学」というコトバ自体の内容がかなり変わってきているので、「歴史の哲学」といっても別に不都合は生じない。今の歴史哲学は、十九世紀のドイツ専売のもののように、世界史の形而上学とか歴史認識の *sui generis* とかいわゆるメタヒストリカルな問題に限られているのではなく、一般に歴史の基礎理論（客観性とか法則とか予言とか）や方法的な問題に経験科学的な分析を加えるものが多くなっている。そのいみでは歴史学や他の社会科学との接近がむしろ要求されているからである。

ガーディナーはこの本を二部に分けて、第一部は Vico から始まって Kant, Herder, Condorcet, Hegel, Comte, Mill, Buckle, Marx, Plekhanov, Tolstoy, Spengler, Toynbee, Dilthey, Croce, Mannheim, Collingwood までのいわゆるヨーロッパの古典的な歴史哲学者をあげて——トルストイはちょっ

と意外だが——その代表的な著作の中心的な部分を要領よく披
萃している。つまり古典的歴史哲学のさわり集である。その選
び方はまことに的確である。そしてその一つ一つにガーディナー
自身が解説と註釈をつけて、こんにちほぼ確立した歴史哲学の
古典的な系譜を示している。それに対して第二部は、それらの
古典的な歴史哲学に対する批判から始まって現代の歴史の諸理
論、とりわけ説明の論理と法則の諸問題、社会科学的方法との
関係などに関する著名な論文を集めたものである。ここにとり
あげられている論文は、主に第二次大戦後イギリスやアメリカ
のいろいろな哲学関係の雑誌にのった約二百数十にのぼるいわ
ゆる「分析的歴史哲学」の中から選ばれたもので、Popper,
Russel, Walsh, Geyl, Berlin, Blake, Hempel, M. White,
Nagel, Gallie, Dray, Frankel, Donagan, Scriven, Mandel-
baum, Gellner, Watkins らの最も主要な論文が集められて
いる。この集め方もまことに適切で、今では分析哲学者の間で
「古典的」といわれているような論文がほとんど収録されてい
るので、この面からみてもこのアンソロジーは現在の歴史哲学
のほぼ決定版といっている。

ただ問題なのは、第一部と第二部の対比のしかたとその比重
の点である。第一部の方が歴史のイデオを論ずる形而上学、歴
史の実証哲学、歴史の構造論、歴史の認識論、歴史観といった多
面的な集録であるのに対して、第二部は同じ頁数を英・米兩國

の日常言語派の論理分析的なものだけに限っていることであ
る。歴史哲学をこの二つに折半することで果して歴史哲学のす
べてが解決できるかどうか。両方を同じ重さだというならば、ガ
ーディナーの秤は前者の読みが軽すぎるのか後者に科学主義の
おもりをつけているのだろうか。ガーディナーは、古典的歴史哲
学をすべて「思弁的」と見るウォルシュ以来の見方を踏襲してい
るが、勿論カントやヘーゲルらのいわゆる観念論的な歴史哲学
は、超越的なイデオをまずアプリアリオリに前提しておいてそれか
ら全歴史を演繹的に構成するといった特異なものなので、そう
いうものを思弁的ということはできるが、ヴィコやコントのよ
うな自然主義の系列のものは——勿論それにもある種の形而上
学の名ごりは見られるが——むしろそれらの観念論的な歴史哲
学に反対して、歴史のいわゆる内在的な原動力を経験的に求め
ようとしている。マルクスになれば、歴史社会の構造分析から
一定の法則を抽出することが主目的で、その中に独特の目的論
や弁証法をおして観念論的とみられるフシが多分にあるとは
いえ、そのインテンションはけっして「思弁的」なものではな
い。そういうものにとだ歴史記述や説明の論理分析だけの武
器で果して対抗しきれぬものだろうか。歴史というこの茫漠と
したものをはつきりさせてゆく手始めとしてこうした論理分析
の方法をとるということは適当には違いないが、またそうやっ
て十九世紀末の二元科学論をうち破った功績は勿論大きいが、

それだからといって、これ一つで歴史のリアリティに完全に肉迫できるかどうか。日常的な次元では或るていどの科学的な正確さが得られても、もつと彫りの深い歴史を読みきるためには、科学主義というようなものに陥らないとしたら、まだまだ道遠しというよりしかたがないだろう。

それに対してマイヤーホフは、古典的歴史哲学をただ「思弁的」の一語では片づけられないといい、従ってガーディナーのこの構想はかたよっているというが（“History and Theory” Vol. I, No. 1. P. 90.）しかしそのマイヤーホフでも自分のアンソロジーの中にはマルクスらのいわゆる歴史の構造論は入っていない。ガーディナーに反対するマイヤーホフの論点は、むしろヨーロッパの伝統的歴史哲学の線を尊重するところにあるのであって、彼の主張は実はドイツ的な「歴史主義」の線にいちばん近い。そのため彼はむしろ Beard, Becker, Aronらの歴史相対主義や歴史の実存哲学を高く評価し、他方、キリスト教の終末論的な意味論も重く考えている。そのため彼はガーディナーの意図するものとはかなり違った方向に歴史哲学を考えようとしていることが明らかである。例えば、ポツパーのものをとりあげるにしても——マイヤーホフもガーディナーと同じようにそれぞれの抜萃の前に自分の解説と註釈をつけている——“Open Society and Its Enemies”の中かの“Has history

any meaning?”の一節をとってきても、ばら批判の対象としているが、またポツパーの「歴史主義」Historicism というコトバがドイツの伝統的な「歴史主義」Historismusとの間に混乱を起すというような点を指摘しているが、要するに消極的に批判するばかりで、歴史学の科学的性格を論理的に明らかにしてゆこうとするポツパーの意図は積極的に理解していない。マイヤーホフ自身の立場は、現代の歴史哲学の一番大事な課題をむしろそれで、Aron などと同じようにかなり相対主義的な立場に寄るようである。だからそうしてみると、その立場自体も一つのかたよりであるといえないこともない。少くともマイヤーホフのものはガーディナー編のアンソロジーにほんとうに理論的に対決するだけのものにはなっていない。二人のねらいはかなり違っているとはいえない。Nagel, The Logic of historical analysisなどはガーディナーのにもマイヤーホフのにもあがっているし、その他ホワイトやウォルシュやバーリンの好論文は両方にあげられているのを見ると、この二人はかなり近い世界に住んでいることが分る。ちなみにガーディナーはオックスフォード、マイヤーホフはマサチューセッツ工科大学の教授である。その点ではアングロ・アメリカの歴史哲学の共通の関心がどこにあるかを見ることができるのでまことに好都合だが、しかしそうしてみるとマイヤーホフの視野はガーディナーのに比べるとずっと小さいものである

ことは疑えない。結局マイヤーホフのアンソロジーはガーディナーの *Theories of History* の補追とみればいいだろう。しかし二人の立場はともにソ連圏のマルクス主義の歴史哲学の進展に対しては全然ふれていないので、その方面のものがいつか加えられて全面的なアンソロジーができる日を待ちたいものである。

しかしとにかくだでさえ多義的な歴史哲学をこれだけにまとめあげて、その完全な体系化ということは今まだ望めないまでも、それに至る段階としてもろもろの歴史哲学説の系譜をつくり上げたことは重要な意味をもっている。基礎的な研究に必要な客観的資料を提供してくれるアンソロジーという形式はその学問の発達の度合を示す一里塚である。だから今のこれをひと時代前の Flint, *History of Philosophy of History*, London, 1893 や Bernheim, *Lehrbuch der historischen Methode und der Geschichtsphilosophie*, Leipzig, 1908 と比べてみると、そこに隔世の感があることは誰の目にもわかるだろう。歴史哲学はもうこれだけの地歩を礎いたのだということをおのこの本は言外に物語っている。

セム人の発生地の問題—Grintz による批判的要約

小川 英雄

セム人の故郷はどこか。他の人種についてもそうであるが、セム人の発生地についても、主として一九世紀以後、有力な学者達の間で幾つかの説が対立したまゝ現在に至った。B. Moscati (*Histoire et civilisation des peuples sémitiques*, 1955, p. 31) の云うように、この問題は現在では以前程議論されなくなっている。何故なら、歴史的な記録の存在し始めた時、セム人は既に広い地域にわたって分布しており（この困難は当然早くから指摘された。cf., Th. Nöldeke, art. *Semitic Languages*, *Encyclopaedia Britannica*, 9th ed., 1886, vol. XXI, pp. 641ff., esp. p. 643）発生地について確定的な証拠が残っていない上に、その後の言語学・民族学・人類学等の方法論上の展開によって、人種の系譜的な流出・分化を簡単な図式で思い浮べることに疑問が持たれたためである。即ち、人類文化の運動は融合・相互作用・分離のより複雑な過程を経るものと考えられるようになったので、この種の問題解明の根本的限界が感じられている。しかし、セム人諸言語の近似性をはじめ、風俗習慣一般の相互の類似は、やはり共通の発生地を仮